2024年3月12日発行
THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES
日本国際文化学会ニューズレター　56号
http://www.jsics.org/

日本国際文化学会事務局
龍谷大学国際学部松居研究室内
〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67
Tel:075-366-2223
Email:
jsics@world.ryukoku.ac.jp

日本国際文化学会第23回全国大会 開催に向けて

第23回全国大会　実行委員長　平島（奥村）みさ（東洋大学）

立春が過ぎ、本格的な春が待ち遠しい季節となりました。東洋大学白山キャンパスのある東京都文京区では早春から初夏まで花まつりが目白押しです。今月２月の梅まつりを皮切りに、３月末からさくらまつり、４月から５月はつつじまつり、６月にはあじさいまつり、と、今年は花暦を７月の全国大会への高まる期待と共に辿ることとなりそうです。

さて、今回の全国大会の総合テーマは「地域における国際文化と大学」としました。特に国内における「内なる国際化」の過程で醸成されつつある「国際」文化を取り上げます。国際文化というと一般的には海外の異文化を扱う印象がありましょう。しかし、国際文化学では“inter-cultural”、すなわち、文化と文化との「際（きわ）、あいだ」の関係性を特に扱っています。現在では「国際」文化の問題は、従来のように「他者」である外国人、異文化との関係性において重要なだけではなくなっているのです。

近年急速に情報・モノ・ヒトの移動が進むグローバル社会において、移動を受け入れる側のホスト国では社会の中で様々な異文化が躍動し、ホスト文化と混淆し、包摂され、多文化化・多様化しながら「我々」の文化として、日々新しく創造されています。このような社会で我々が共にどう生きるか、「内なる国際化」という問題が重要になりつつあります。日本社会、そして大学もその例外ではありません。

大学における国際文化教育とは、従来多くの場合、学生を海外へ留学させる、海外で実習・研修の実施、というプログラムが一般的でした。ですが、現在、国際化はすでに日本国内、大学が属する地域内、キャンパス内、教室内で進行しており、私たちが日々を生きる足元の社会の変動について、学生と教員が共に理解を深め、地域の人々と共に歩むための必須教育として、「域学連携教育」が注目されています。本学会が推進するICCO（文化交流創成コーディネーター）資格取得のための学生対象短期集中セミナーはまさに域学連携教育の好例であります。

今回の学会では、開催校における域学連携教育の一端もご紹介させていただきながら、日本社会、大学における内なる国際化を議論する機会となればと存じます。

ありがたいことに、すでに７件もの共通論題が報告されることが決まっております。自由論題のほうも、みなさま、ぜひ奮ってご応募くださいませ。日本国際文化学会内外から、多くの方のご参加をお待ち申し上げております。

開催日
2024年７月13日（土）、14日（日）

開催場所
東洋大学白山キャンパス
〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

mail to：intercultural2024@gmail.com

〒112-8606東京都文京区白山5-28-20
東洋大学社会学部国際社会学科気付
日本国際文化学会第23回全国大会実行委員会
実行委員長　平島（奥村）みさ

アクセス

都営地下鉄三田線「白山」駅
A3出口から「正門・南門」徒歩5分
A1出口から「西門」徒歩5分

東京メトロ南北線「本駒込」駅
1番出口から「正門・南門」徒歩5分

都営地下鉄三田線「千石」駅
A1出口から「正門・西門」徒歩8分

東京メトロ千代田線「千駄木」駅
1番出口から「正門・南門」徒歩15分

JR山手線「巣鴨」駅
南口から「正門・西門」徒歩20分
都営バス10分「浅草寿町」行「東洋大学前」下車

共通論題タイトル

〈あの世〉の国際文化学
代表者：吉岡剛彦（佐賀大学）

エラスムス像と貨狄様　「未知との出会い」が生み出したグローバル文化交流
代表者：芝崎厚士（駒澤大学）

思想家としての鶴見和子――中国、環境、女性
代表者：松居竜五（龍谷大学）

多文化共生と国民統合
代表者：川崎賢一（駒澤大学）

人の移動と国際文化
代表者：加藤恵美（帝京大学）

「文化外交官」柳澤健の戦前・戦中・戦後:世界をつないだカタリストの国際文化学的考察
代表者：湯浅拓也（大阪産業大学）

文化としての「過去の伝承」――その条件、課題、そして意義
代表者：藤田賀久（多摩大学）

豊かな２年間の御礼

今期で任期を終られる都丸会長にご寄稿いただきました。

会長　都丸潤子

皆様、２年間、至らぬ点が多々ございましたが、大変お世話になり、本当にありがとうございました。コロナ禍の只中で、任期を延長してご尽力くださった前会長の馬場先生を、微力ながら引き継がせていただいた２年間はあっという間でした。執行部の皆様、各委員の先生方、常任理事・会員の皆様のご配慮や熱意に溢れるご尽力がなければとても務まりませんでした。心から御礼申し上げます。

この２年の間には、ロシアのウクライナ侵攻やガザをめぐる戦争など、人類が歴史上の経験を通して学んできたことは一体何だったのか、と悲しくなるような出来事が続き、私たちの日常生活を一変させたコロナ禍の残滓もある中、トルコ地震や能登半島地震のような痛ましい災害も各地で起こりました。平和的共生のための文化の構築や防災・減災文化の創成の重要性も改めて痛感させられました。また、コロナ禍で高校生が内向きになって「国際」を冠する大学の学部・学科の志願者が減る事態も起きていると聞き及び、いわば日常文化の単位・視野の萎縮も起こっているのではと危惧されます。

このように文化をめぐる難しい課題の数々を突きつけられる中でも、本学会では嬉しいことに、神戸大学、名城大学の大会実行委員各位のお力と会員の皆様のご協力により、対面での研究大会が復活し、学会助成による研究会も活発に開かれるようになりました。そこでは、本学会ならではの、国家単位を超えた地域社会からトランスナショナルな集団、さらには宇宙や死者にも至る広く多彩なテーマについて、対面・ハイブリッドでの活発な議論が繰り広げられました。久々の対面大会には同窓会のような喜びもあり、コロナ禍の最中に書面やZoomでの大会を開催して会員間のつながりを維持してくださった近畿大学の実行委員会・前執行部の皆様にも感謝の念を新たにいたしました。ICCOの短期集中セミナーも松居竜五先生をはじめ関係各位のお力で2023年には３年ぶりの活発な対面実施が叶いました。20周年記念事業も、委員の皆様のご献身と綿密なご相談の積み重ねによって、さまざまな難しい局面を乗り越えて、いよいよ教科書としての出版に向けて具体的な構想がまとまりつつあります。歴代会長・執行部の先生方のリーダーシップのもと、諸先輩方が20年間で蓄積されてきた学会の成果発信の機会がさらに広がりそうです。このような時代だからこそ、本学会の活動成果を広く皆さんに、特に若い世代に知っていただくことが重要なのだと思います。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

この間、対面・Zoom双方の機会に会員の皆様のご研究から多くを学び、近しくご相談や意見交換もさせていただき、本当に楽しく豊かな２年間でした。私自身の狭かった視野も広がり、自由に和やかに専門分野を超えて交流・議論のできるこの学会がますます好きになりました！特にのんびりしがちな私にいつも絶妙のタイミングで重要なご連絡をいただき、困った時に心強く温かいご助言やモラルサポートをいただいた事務局の松居竜五先生と池田悦子様、そして葉柳和則・川村陶子両副会長、幹事の馬場孝先生と高橋梓先生に深く御礼申し上げます。

４月からは新たに３年のご任期で、川村新会長、葉柳副会長、倉真一新副会長のもと、盤石の新執行部体制が作られます。私もしばらくの間、幹事として末席に加わらせていただきます。新執行部・事務局の先生方、会員の皆様、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

皆様の益々のご健康とご活躍をお祈りいたします。

都丸会長、2年間本当に
ありがとうございました！

特別企画　編集長対談

年報『インターカルチュラル』の前編集長と現編集長に対談をお願いしました

現編集長　飯森明子
前編集長　小林文生
（聞き手：松居竜五）

松居：本日は『インターカルチュラル』の新旧編集者による対談ということで、小林文生先生、飯森明子先生のお二人にオンラインで語っていただきます。最初は小林先生、飯森先生の日本国際文化学会との関わり、つながりについてお話しいただければと思います。

小林：改めて、どういうふうに関わってきたのだろうかと考えてみると、私は創設時には関わっていないんです。東北大学の改組の後に国際文化研究科に所属することになって、その時に、我々は国際文化をどういうふうに捉えていくんだという議論をやっていたわけです。そういう流れの中で2006年に第5回の全国大会が東北大学で行われて間接的に関わって、見ていたというのが最初の関わりです。最初は自分自身に対してやや懐疑的なところがあって、遠巻きに見ていたのですが、2009年に研究科長になった頃に、国際文化学会で「国際文化」と名の付く大学の情報交換会の案内をいただいて、「これは絶対に行くべきだな」と見た瞬間に思って、2009年10月に第2回国際文化学部・大学院等情報交換会というのが東海大学でありまして、そこで、他の学部・研究科のいろんな紹介を聞いて、本気で取り組んでいかなきゃと改めて意識を持ちました。

この情報交換会とほぼ同時に学会に入会して、それ以降はとにかく「面白い」というのが第一の印象で、会員になってから何年後かに会長になったのですが、その時のニューズレターに書いているのを振り返って、読んでみると、会長とは言っても学会を引っ張っていくというか、リーダーとしてもっていくというのではなくて、なにか自分自身が楽しんでいるなというのが文面から見えてきまして、とにかく面白い学会であるというのが第一印象です。これほど元々が違う分野の研究をやっている人たちが集まって対話できるというのはとても面白くて、そこに私自身が一番関心のある「主体」であるとか「一人称」であるとか「語り」であるとか、そういう概念をめぐる様々なものが、他人との対話や、あるいは論文を読ませてもらったりとかする中で、他の学会では得られない面白さがここにあるというのを感じて今に至っている、そんなところです。

飯森：共通論題を組むので、山岡先生、片桐先生にお誘いいただいて、学会に入ったのが、佐賀大会です。翌年の札幌にも行き、参加させていただいたと思います。山岡先生、片桐先生がIPR太平洋問題調査会について研究会として立ち上げていらして、私も参加していました。それに参加した経緯というのが、当時日米協会を研究していまして、知的交流、若い世代の交流に関心がありました。英語圏が主になるんですけれども、どういう人脈があるのか、それは現代とどうつながっているか、みたいなところを研究しています。もともと国際政治学会に入っておりまして、日本外交史の分野で勉強させていただいていました。その大きな学会には国際交流分科会というのがあって、そちらに顔を出すようになったら、国際文化学会の先生方がいらしたということで、国際交流分科会とこちらの学会というのは非常に接点が多いです。またこの学会は学際的にいろいろと対話ができる。つまり、政治学だけでなく、社会学、社会史、歴史というところに関心があったものですから、そういう意味で学際的に議論ができるというところが非常に魅力的な学会です。編集委員としては、小林先生の前に、若林先生のときに編集委員に参加させていただいて、小林先生の時にも編集委員をお手伝いしています。

松居：ありがとうございます。それでは本題になるんですけれども、長い間編集長としてご活躍いただいた小林先生に編集委員としての経験について、ご自由にお話しいただければ。

小林：枠組みとしては、第17号から21号の5年間、実質、2018年度から2022年度の5年間に委員長をやらせていただきました。そうですね、大くくりで行ってしまうと、やっぱりなんか楽しいなという言葉が出てきます。苦労はいっぱいありましたけれども、それ以上に編集は楽しかったですね。面白いというよりも楽しいという。何が楽しいかというと、出てくる論文を読むのが楽しかったし、査読者と執筆者の対話を間接的に見ながら、ここに編集委員長としてあるいは編集委員としてちょっと対話に加わったりするという、場合によっては口を出すようなこともありましたから、対話の過程というのが、編集委員をやってみないと分からないところ、出来上がったものを読んだだけでは分からない編集の楽しさがあった。

それから、創刊以来ずっと特集として全国大会のシンポジウムのテーマが掲載されますよね。これを踏襲してきたわけですけども、これは思った以上に意義のあることだなと思いました。今年は学会としてこういうテーマで取り組むということが、全国大会の担当校が主になってやるわけですけれども、学会としてこういう問題に取り組んだということが学会誌の冒頭に第一特集として掲載されることが意義深いことと思っています。以前ニューズレターに掲載された、これまでの20号を振り返っての記事に書いた記憶がありますが、創刊号でかなりしっかりと枠組みが組まれていて、その後もほぼ同じように踏襲されているというのは、なんというか伝統の力というものを感じます。しかも学会誌といっても、学会の内、学会の場の雑誌にとどまらないというところがいいのかな、お店に並べるという当初のコンセプトがあったようですけど、学会の顔として、一般の人が手にとっても面白い、かといって易しくしているという意味ではなく、学術論文は学術論文として掲載しているわけですけれども、それでも、

さっきの特集であるとか、あるいはフォーラムの様子であるとか、教育に関する部分であるとか、ICCOのこともありますし、「私の3冊」も読書案内として始まったものが継続していますよね。あれも他の人の研究の一端を覗かせていただくという意味ではとても深いんです。ほかの方が何を読んでいるんだろうっていうのは、みんな関心のあることだし、そのようなものが盛りだくさんになっている学会誌はなかなか魅力があると感じています。

若林先生から引き継ぐときに、表紙をどうするかということもお話を伺ったんですね。その時に、どなたかお知り合いの先生に頼んで写真を撮ってもらったり、画家に絵を描いてもらったりした、ということで、編集委員長の責任で選ぶものと考えまして、最初に浮かんだのが現在描いてもらっている藤田莞爾さんです。なぜ藤田莞爾さんかというと、2006年、私の父が亡くなる直前にそれまで書き溜めたものを本にするときに、父が図書館関係だったので、図書館関係の方が動いてくれて編集をやったんですが、その本の表紙デザインが藤田莞爾さんだったのです。表紙が本当に良くてびっくりしたんです。そしてあれこれ話したときに、藤田さんはすごく文学好きで、特にドストエフスキーなんか読み込んでいて、1937年生まれで平野先生と同い年なんですよね。とにかく絵にぞっこん惚れたということでお願いして。最初17号にはこういう絵が来るとは思っていなかった。11号から16号までの5号分を事務局から藤田さんに送っていただいて、こんな内容のものに表紙をつけてもらえますか？とお送りすると、かなり本気で読んでくれてこのような絵が出てきたと。そして、藤田さんが縄文に入れ込んでいるというか、縄文が大好きで、縄文の柄というシリーズを描いていたりするんでそういうことも絵に影響していると思いますが、これは会員の皆さんに好評だったので意を強くしてこれまでずっとお願いしてきたわけです。毎号毎号驚かされる絵で、いいなとそんな感じです。

松居：では飯森先生に今後のインターカルチュラルの編集委員長としての抱負や全体としてお考えになっていることをお話しいただければ。

飯森：この10年くらい学会に関わらせていただいて、世代交代の時期にあると感じています。自分もどの立ち位置にいるかというのは言いづらい部分でもありますが、いろんな意味で国際文化なり、関連の学問が学際的に広がっていったときに、どうやったら新しい世代を繋げていくのか、育てていくのかという部分で、新しい世代がたくさん活躍していただけるような場を作っていけたらいいのかなと思っています。そして、ICCOが一定の成果を上げているのは皆さんご存知のことなので、これから続けていくことや広げていくのか、そして、現段階どうなっているのかを聞いてみたいという気もいたします。特に、初期の参加者が実社会の中でどのような問題意識を持っていらっしゃるのかをどこかで聞いてみたいという気がいたします。

いろいろと意見があると思うんですけど、編集委員長としては、投稿論文に期待をしたいと思います。投稿はそれなりに数があるんですが、すんなりと査読OKというのが出ないという部分ですね。その部分をどういうふうにフォローしていくのかというのが編集委員会なり執行部なども考えなければいけないと思います。

今、校正が最終段階にきています。やっていて、査読の段階で非常に協力的な先生が多くて、他のところでも経験がありますが、査読をお願いしますと依頼しても、忙しくてね、と断られる確率が結構高いんですが、この学会ではほとんど査読を断られることがないというのはものすごいことだと思うんですね。本当にありがたいと思っています。委員の先生方からもたくさんお力をいただいて、率直な意見をいただけたりして、心強いです。

松居：他に何か補足などあればお願いします。

小林：編集の風行社の犬塚さんとも二人三脚で本当にうまくできたと思っています。あの、編集というか出版社さんとの関係でいうと、これがすごくって、風行社さんにこれまでお世話になりましたけど、本当に丁寧に確実に返ってくる。

飯森：犬塚さんとご一緒の伊勢戸さんも丁寧なお仕事をされています。本当にありがたくて財産ですよね。

松居：今日はありがとうございました。

松井事務局長（左上）小林前編集長（右上）
飯森現編集長（左下）

素晴らしい対談をありがとうございます！

私の研究歴―会員紹介

本号では加藤恵美会員にご寄稿いただきました。
移民をテーマとする研究・教育は、教室から地域社会へと拡がります。

加藤恵美

帝京大学　外国語学部
国際日本学科准教授

一般市民向けレクチャーの様子

ありがたいことに自分の研究歴を振り返る機会をいただきました。私の研究テーマを一言でいうと、「地域社会における多文化共生」ですが、戦争や植民地支配といった国際的な歴史問題への対処を多文化共生の課題として考察するという点に特徴があります。

修士課程を修了した後、民間の研究所に２年ほど勤務し、地方自治体の行財政改革のコンサルテーションの仕事に従事しました。短い期間でしたが、良い上司に恵まれて、多くのことを学びました。しかし、クライアントのいるコンサルテーションの仕事は、問いと答えがあらかじめ準備されているために物足りなく感じられました。その後、私が大学院の博士課程に入学し直したのは、自分で問いと答えを探求する学問的な喜びを求めてのことだったと思います。

とはいえ、博士号を取得するまでの道のりは険しかったです。博士課程入学10年目に博士号をようやく取得しました。それは私の能力不足によるものでした。その一方で、子育てが一番大変な時期と博士課程の後半が重なったことも大きかったと思います。子どもと一緒に寝落ちして数時間後にムクっと起き出し朝まで論文を書くという日々は、本当に辛かったです。しかし在籍した大学院の先生方の励ましと辛抱強いご指導のおかげで、そうした日々を乗り越えられました。

博士課程の研究テーマは、移民の教育の日英比較でした。ナショナリティやシティズンシップが両国でどのように構築され、国境を超えて移動する人びとを包摂したり排除したりするのかを、複数の地域社会でのフィールドワークを通じて考察しました。

帝京大学の学生さんとのフィールドワーク

そうした研究を通じて、私は在日コリアンに強い興味をもちました。在日コリアンとは、日本が朝鮮半島を植民地支配していた時代に朝鮮半島から日本に移動してきた人びととその子孫のことを主に指します。博士課程での研究では、私は彼らについて「よくわからない」ということが「わかった」という感触しか得ることができませんでした。そのため博士号を取得して以降の10年数年の間は、そうした感触にもとづいて彼らを対象とした研究に取り組んできました。

最近の業績としては、東日本大震災で被災した仙台の朝鮮学校の再建をめぐる格闘を記した論文、そのフィールドワークを通じての気づきを学生向けに書き下ろした教育用のテキストがあります。また、地域社会の多文化共生に市民として貢献したいと思い、在日コリアンが集住する川崎市桜本地区における地域史発信を目的とした市民活動にも参加しています。この地区は私が修士課程の学生の頃から長年フィールドワークを行ってきた地域で、住民の皆さんのご協力のおかげで出すことのできた研究の成果がいくつかあります。市民活動には、彼らから「受け取る」ばかりでなく私が微力であっても何かを「与える」ことができたらという思いで参加しています。

研究会報告

今年度は二つの研究会が開催されました

死者の国際文化学―飛鳥、ケルト、フィンランド―

2024年2月18日（日）、近畿大学において国際文化学シンポジウム「死者の国際文化学――飛鳥、ケルト、フィンランド――」がハイブリッド形式で開催された。

本シンポジウムは前日の2月17日にプレイベントとして明日香村のエクスカーションを開催した。寺院と古墳をめぐる学びを踏まえた本会は、死者と生者の両世界のあいだに目を向けることで国際文化学の議論を拡張することを目的とした。

第一報告では高橋梓（近畿大学）が「飛鳥を歩き、ケルトを想う――堀辰雄、プルースト――」において、日仏の小説作品の比較を通じて、古墳文化や巨石文化を生死の境界線と捉える考察を展開した。

第二報告は木原誠（佐賀大学）による「此岸と彼岸/事実と虚構の＜際＞、ケルト文化」である。ここではケルト神話の死生観が取り上げられ、生死の連続性が示唆された。

第三報告では田中佑実（北海道大学）が「死者と生きる今昔―フィンランド北カレリア地方　死者のカルシッコの事例から―」として自然と死者の結びつきを見出すことの意義が主に文化人類学の手法に基づき提示された。

以上の三つの報告を受け、コメンテーターとして藤田賀久（多摩大学）が主に仏教の死生観から、次いで松井真之介（宮崎大学）がキリスト教の煉獄思想との関連において議論を拡張させた。

質疑応答では対面とオンラインの参加者が自由に意見を交換した。

本シンポジウムでは、死という不可視の領域を想定し、世界の中に生死の境界線を見出すことの文化的意義をめぐる議論を人文学の方法論に基づき展開したこととなる。報告者たちの分析は、神話やアニミズムの現代的な意味を再検討するものでもあり、今後の国際文化学に新たな展望を拓くこととなったのではないだろうか。

（高橋梓）

『「よりどころ」の形成史』―著者による講演会―

2024年 2 月 26日（月）の13 時 30分から 15 時 30分まで東北大学大学院国際文化研究科棟1階101号室において、月野楓子氏（沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科准教授）をお招きし、「公開講演『「よりどころ」の形成史』―著者による講演会―」を開催した。運営は小山あゆみ、王霄漢、阿部純（東北大学大学院国際文化研究科博士後期課程）が行い、当日の司会を小山が務めた。

「開会の辞」では、阿部が本講演の主催である東北大学国際文化研究会の紹介と、本講演の開催に至った経緯および趣旨を説明した。

続いて、月野氏の講演が行われた。講演では、月野氏の著書『「よりどころ」の形成史―アルゼンチンの沖縄移民社会と在亜沖縄県人連合会の設立―』の内容を中心に、太平洋戦争前後の背景を踏まえながら、アルゼンチンにおける沖縄移民の生活や組織形成に関する解説がなされた。また「よりどころ」という表現を採用するに至った経緯や、フィールドワークを行う中で直面した問題についても話された。

質疑応答では、世界のウチナーンチュ大会、ディアスポラという概念の適用可能性、沖縄移民に対する皇民化教育の影響、研究者と当事者の距離感、モノの移動に関する研究等について、多くの質問が寄せられた。さらにフィールドワークに関しても活発なやり取りが交わされた。

最後の「閉会の辞」では、高橋梓氏（近畿大学法学部教養・基礎教育部門准教授）が、堀辰雄や「動詞としての文化」とも関連付けながら講演内容を振り返った。また、何かに「よりかかる」ことで生きてゆけるというアルゼンチン沖縄移民の心理・経験は、コロナ禍を経験した令和の今だからこそ考えるべき重要なテーマであると述べた。

アルゼンチン沖縄移民と「よりどころ」をめぐる会場の白熱した議論は、今後の国際文化学の発展に寄与すると思われる。最後に、今回の講演会開催を助成された日本国際文化学会に対して深く感謝の意を表する次第である。

（小山あゆみ・王霄漢）

近畿大学でのシンポジウム

東北大学での講演会

事務局からのお知らせ

2024年度のICCOに向けて

2024年度の短期集中セミナーは京都での対面開催を検討中です。開催日程については、3月中旬に学会ウェブページにて案内予定です。参加校および会員のみなさまのご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

2023年度の資格認定申請受付は3月31日（消印有効）までとなっております。該当する学生がおられる場合には、申請のお声がけをお願いいたします。短期集中セミナーの参加学生のほか、学習活動報告による資格取得も可能です。

※　詳細は学会ウェブサイトのICCO資格認定制度から、「2023年度版 学生からの申請（資格認定申請）」をご確認ください。

第23回全国大会自由論題発表者募集（締切：3月20日）

第23回全国大会（東洋大学、2024年7月13日・14日開催）の自由論題の発表者を募集しています。

- 自由論題は原則として個人研究発表ですが、内容により複数の発表者による発表も可とします。
- 応募は、氏名・現職・連絡先・自由論題発表題目・キーワード（３～５語）を冒頭に記し、発表要旨をつけて、 全国大会実行委員会事務局までメールにて提出をお願いします。

※　詳細は学会ウェブサイトの全国大会発表要項（PDF）をご確認ください。

- 応募先/問い合わせ先： 第23回全国大会実行委員会　intercultural2024@gmail.com

第14回平野健一郎賞募集（締切：4月30日）

第14回平野健一郎賞の募集を開始します。多数のご応募をお待ちしております。
応募に関しては学会ウェブサイトの「平野健一郎賞規程」をご覧ください。

- 応募対象：本学会に所属する若手研究者
- 授与対象：直近の学会誌『インターカルチュラル』に掲載された論文、又は会員の自薦、他薦により推薦のあった論文で大学紀要などに掲載された論文等
- 応募書類：応募書類は審査後に返却いたします。
- 応募結果の発表：第23回全国大会総会において発表し、授与式を行います。
- 応募先/問い合わせ先：日本国際文化学会事務局 jsics@world.ryukoku.ac.jp

会費納入のお願い

2023年度会費を未納の方はお振込みをお願いします。
正会員 一般会員：10,000円、大学院生：5,000円 学部生：2,000円（学会誌は別途購入）

◆ゆうちょ銀行から◆
記号番号：00920-8-325835　名義：日本国際文化学会

◆ゆうちょ銀行以外から◆
ゆうちょ銀行 店番〇九九・店番099・当座預金・ 口座番号0325835 名義：日本国際文化学会

- 過去の会費未納分は相当額の学会誌購入でも充当できます。
- 会費納入に困難を覚える方に対する減免制度があります。

ご連絡先変更時のお願い

ご所属、ご住所等の変更の際には、学会事務局までお知らせください。4月下旬に学会誌『インターカルチュラル』第22号を発送予定ですのでご協力お願いいたします。
連絡先：日本国際文化学会事務局（松居・池田）kumagusu@world.ryukoku.ac.jp

【編集後記】

2月は研究会のハシゴ！まずは編集者・高橋が近畿大学でシンポジウムを開催し、前日の飛鳥エクスカーションから沢山の参加者にご参加いただきました。翌週は東北大学の講演会に参加し、充実の議論を楽しみました。今後も研究会が盛んになることを期待しています！（近畿大学：高橋梓）

飛鳥・石舞台古墳の前で記念撮影